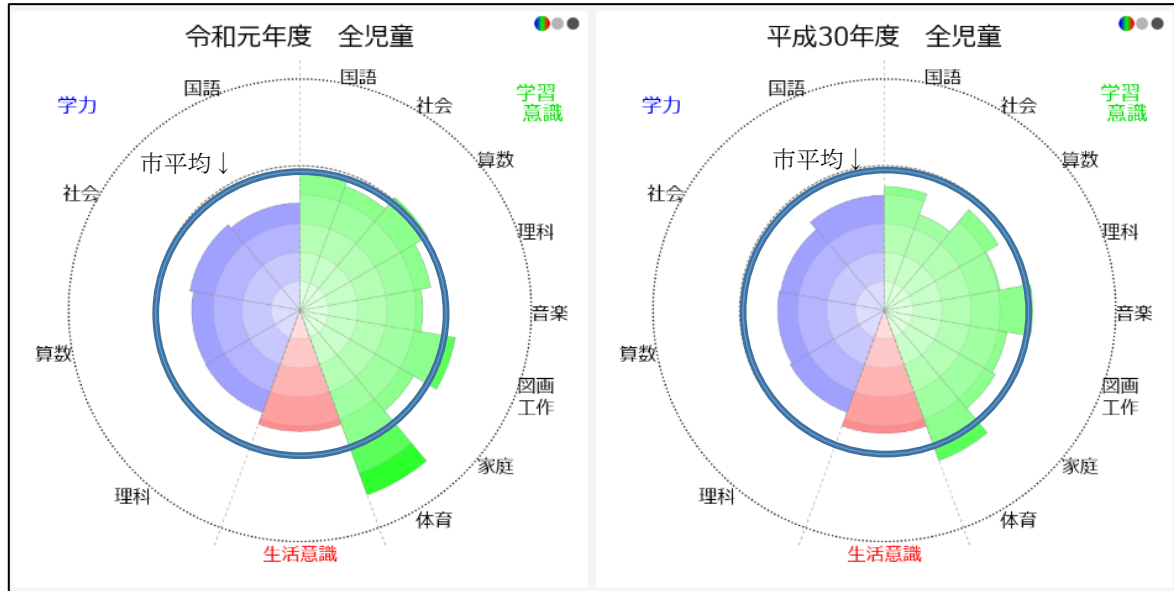


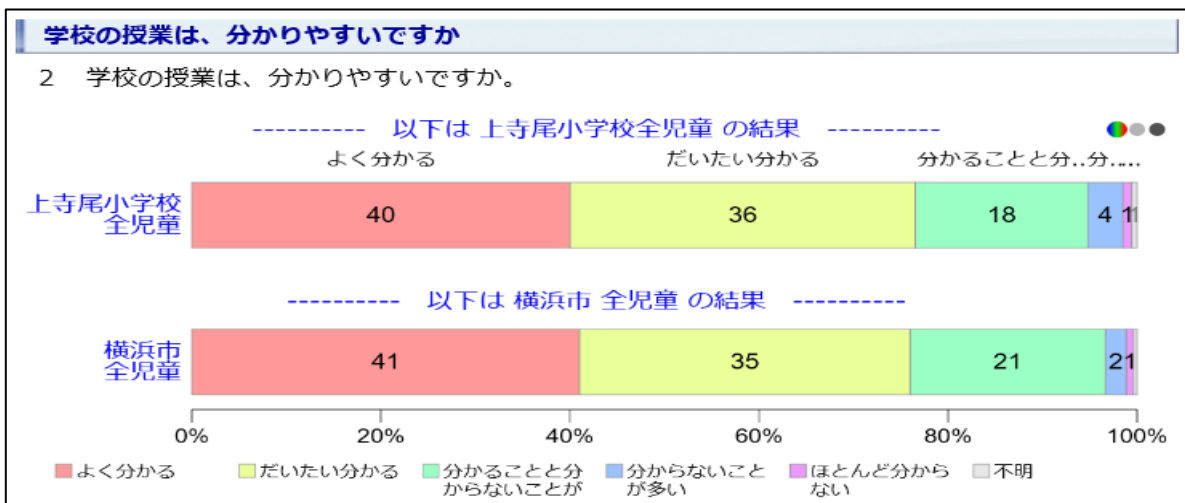
令和元年度 学力・学習状況調査の結果

○ 学力・学習意識・生活意識分析チャートから



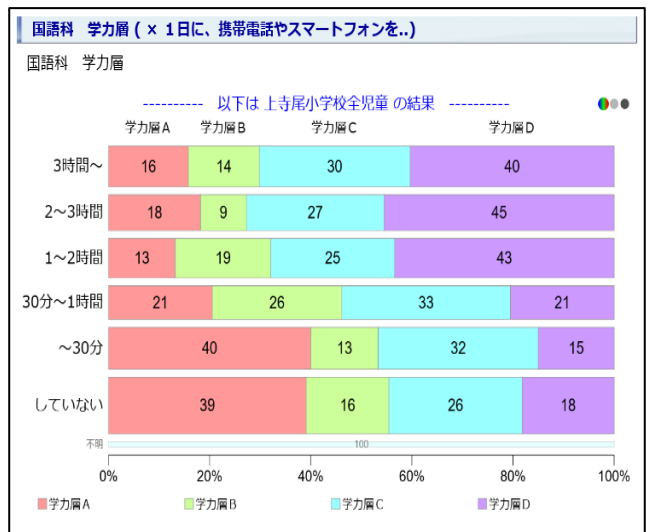
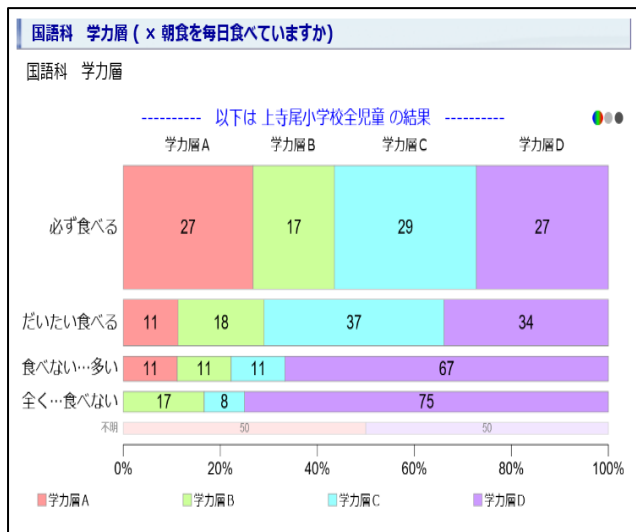
学力は、全体的に市の平均より低い状況にあり、学習内容の定着が十分ではありません。学習意欲も学習意識は、全体的に昨年度より高まりを見せ、ほぼ横浜市の平均値となりました。高まりつつ学習意識を維持しつつ、学習内容の確実な定着をはかるため、授業のみならず家庭学習、自主学習の進め方についても支援していくことが課題と考えます。

○ 学力向上に向けた視点



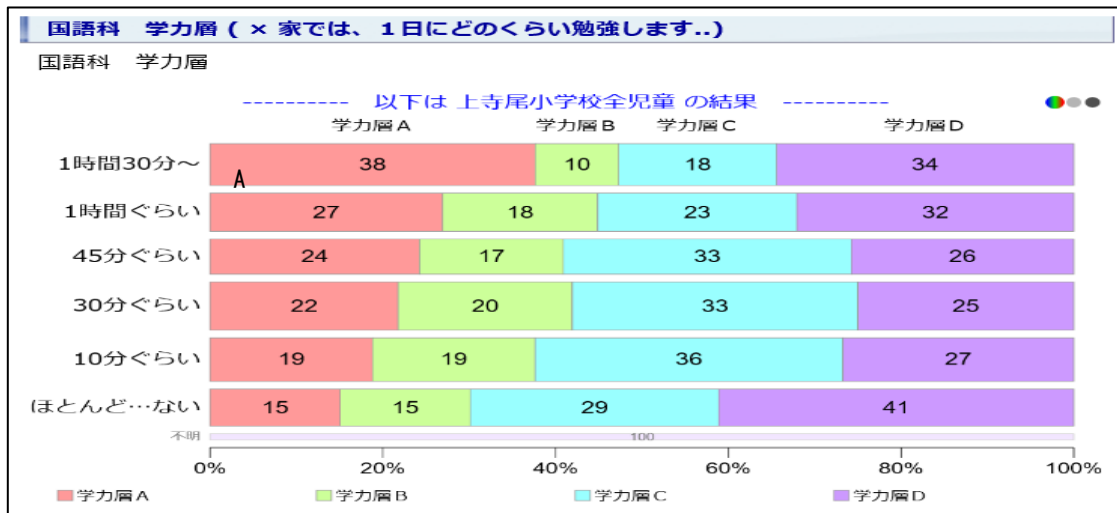
授業については、およそ70%の児童が「分かる・だいたい分かる」と答えています。学力の向上に向けた取り組みとして、分かりやすい授業を維持していくとともに、学んだことを定着させるための手立ての充実が課題と考えます。記録（ノート）の取り方や自主学習の質の向上、身に付けた知識を活用する場面の設定（発表、学びあい）など、授業中、授業外を問わず、学習の質と量の向上に向けた取り組みを重視していきます。

○ 学力層（※）ごとの生活意識との比較分析



※学力層・・・児童数を正答率で四分割したもの (例) 学力層 A → 正答率上位の25%

学力層※と生活意識との相関関係では、「朝食を食べているかどうか」や「スマートフォンの使用時間」について、昨年度と同程度の学力層との相関関係が認められました。食事と睡眠を規則正しくすることで、学校生活への活力や授業中の集中力を維持することが期待できます。また、スマートフォン等は依存性が高く、長時間の利用によって生活習慣の乱れや物事への興味関心の喪失など、学齢期の児童に対する様々な影響が指摘されています。学校では、引き続き児童の生活意識にも目を向け、規則正しい生活習慣の定着や適切な学習環境の構築にむけて、保護者の方々のご協力をいただきながら、手だてを講じていきたいと思ひます。



また家庭学習について、およそ3割の児童が毎日1時間以上行っているにもかかわらず、学力層 D (正答率下位25%)であることがわかりました。これは、「時間をかけて学習に取り組んでいるにもかかわらず、成果が出ていない」という当人にとって苦しい状況にある児童が、一定数いるということが考えられます。学校として、宿題やテスト直しの取り組み方をより丁寧に伝えたり、他の児童と自主学習の取り組み方について情報交換をしたりする場を作ることで、児童一人ひとりの自主学習の質の向上を促していきたいと思ひます。